

【ねがいましては】

第86号

平成8年6月25日

共和珠算学習塾

「叱る」

こと「叱る」と言うと、子どもたちは心を「ビクッ」とさせるもの、私だって同じです。

PHP 7月号に「なるほど!」と思わせる記事がありました。

烏帽子山最福寺(鹿児島県)法主 池口 恵観(いけぐち えかん)さんのものです。

この方のお寺には常に十数人の修行僧がいっしょで、しかもそのほとんどが親に叱られることなくそだったということです。その方は厳しい修行や恵観さんの厳しい「叱り」を通じて甘えた生き方で固まってしまっている状態、つまり自分の考えに固執しきっている状態から脱出してゆくのだそうです。

「今の親はまるで腫れ物にでもさわるような感じで子どもと接しているんじゃないでしょうか。子どもは勉強さえしておけば、家事の手伝いや行儀の悪さ、他人への思いやりのなさも多めに見られ、親は何でも言いなりになるという環境に育っているんです。

勉強以外に本当は親が子どもに教えなくちゃならないことはいくらかもあるんじゃないでしょうか。食事の前に『いただきます』ときちんと言う、家に帰ってきたら、たとえ誰がいなくたって『ただいま』と挨拶する。どんなにうさがられても叱りつけながら、そういう基本的なことを教えてやることをしないから、親と子がぶつかることがない。(中略)他人に対する思いやり、他人に迷惑をかけないこと、親しき仲にも礼儀ありといったレベルのことは、ふだんから親と子が「はら」をあわせて接していれば、自然と学ぶことができるものなんです。結局、親が子どもを叱れなくなっちゃっているんですね」

そしてこの方がめざすもの・・・「同悲」→(人の悲しみを我が悲しみとし、人の苦しみを我が苦しみとして共有すること)の境地に立つことだそうです。

最近の「いじめ」の問題にしても、原因は同悲の心が親子間に欠落していると言っています。

「大人になっても、子どものような素直な気持ちを失わない人は、学び覚えた知識を知恵として活かすことができます」とも言っています。

私の実感なのですが、私のように直接子どもたちとかかわっている者やご両親たちに向けて「もっと勇気を出して体当たりしなさい!」と、叱られているように感じました。

私の友人に次のような方がいます。若い頃からくらしがとても貧しく、奥さんにはとかく苦労をかけっぱなし、ご自身は働きっぱなしのせい子どもともなかなか遊んでやれず、そんな中でついに彼は事件を起こしてしまいます。今は立派に罪を償われ、ご家族そろってしあわせに生活されていますが、この方はとても一本気なところがあり、その過去の自分のしたことが負い目になっていたようで、なかなか子どもたち3人には強いことが言えないようでした。先ほどの恵観さんのお話のことからも分かるように、子どもって結構親から本気で叱られないと寂しさを覚えるところがあるようで、3人共に生活面ではかなり自由奔放(めっちゃめっちゃ)であつたように記憶しています。

やはり親と子、お互いに真剣に気持ちをぶつけ合うことが必要なのかもしれません。かといって突然態度が激変するの子どもにとっては戸惑いを感じると思いますので、慎重にお願いいたします。

「同悲」、教科書には載っていないとても大切なものとして心に留めましょう。